
【講 義】

くずし字について 「くずし字の見方・読み方」

講師 齋藤真麻理（国文学研究資料館准教授）

恋田 知子（国文学研究資料館助教）

平成27年度 日本古典籍講習会

くずし字の見方・読み方

②

国文学研究資料館 齋藤真麻理

平成28年1月26日

くずし字の見方・読み方②

・くずし字の楽しみ
—永井荷風『きのふの淵』より—

・くずし字と先人知

・くずし字レッスン10
—『竹取物語』から『雨月物語』まで—

くずし字の楽しみ —永井荷風『きのふの淵』より—

カ、
、ヲ

（『荷風全集』第17巻）

四十三年の秋、富松は客に落籍せられて赤阪新町に小料理を出したが、四五年にして再び芸者になり、（中略）肺を病んで死んだ。わたくしは一時全く消息を知らなかつたのであるが、（中略）墓が谷中三崎町の玉蓮寺に在ることをも聞知り、寺をたづねて香花と共に、

昼顔の蔓もかしくとよまれけり
の一句を手向けた。

られて赤阪新町に小料理を出したが、四五年にして再び芸者になり、（中略）肺を病んで死んだ。わたくしは一時全く消息を知らなかつたのであるが、（中略）墓が谷中三崎町の玉蓮寺に在ることをも聞知り、寺をたづねて香花と共に、

2

くずし字と先人知

気づきにくい」とですが、欧米諸国とちがつて、日本人は自らの歴史風土を自在に行き来する能力を失つたのです。それ自体、世界史のなかでも特記すべきことですが（中略）、今まで読めなかつた数百年分の智恵と笑いと涙こそ、世界遺産だと信じるからです。

（株式会社凸版印刷HPより、ロバート・キャンベル氏）

私たち明治以前の日本を知るため、ひたすら文字を読みます。しかし皮肉なことに、その文字は、近代一五〇年の達成と引き換えに、またく読めなくなってしまいました。活字にだけ頼る人は、日本のこと、ほんの一部しか知ることができません。

3

1. 『竹取物語』

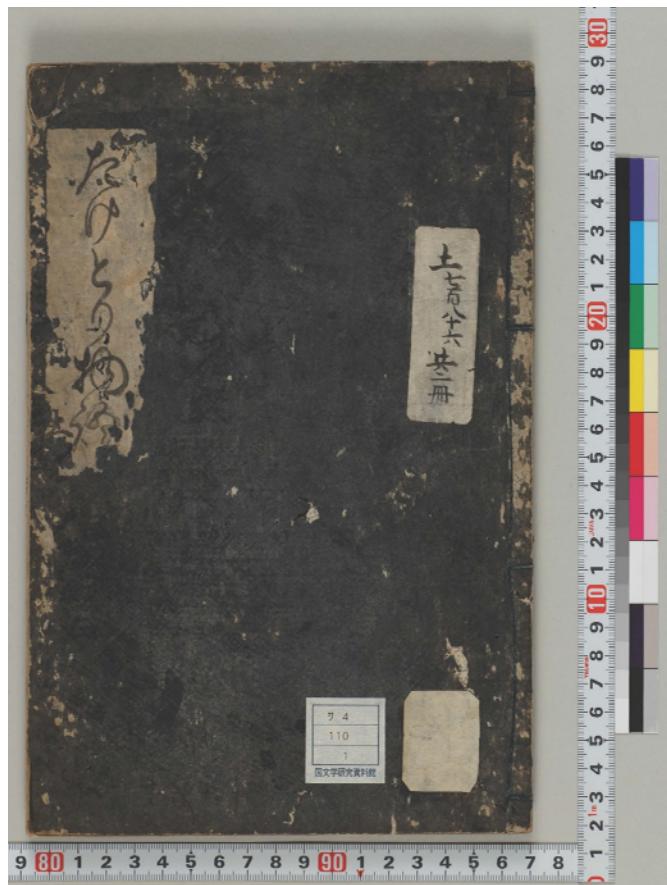
- 国文研蔵。請求番号サ4-110。
- 27.0×17.8cm。2冊。
- 古活字版。
- 印記「平出氏書室記」

【竹取物語】

平安時代初期の物語。作者未詳。竹取翁は、光る竹の中から「三寸ばかりなる人」を見つける。姫は美しく成長し、かぐや姫と名づけられる。姫は五人の貴公子や帝の求婚をも拒み、八月十五夜に月の世界へと帰つてゆく。

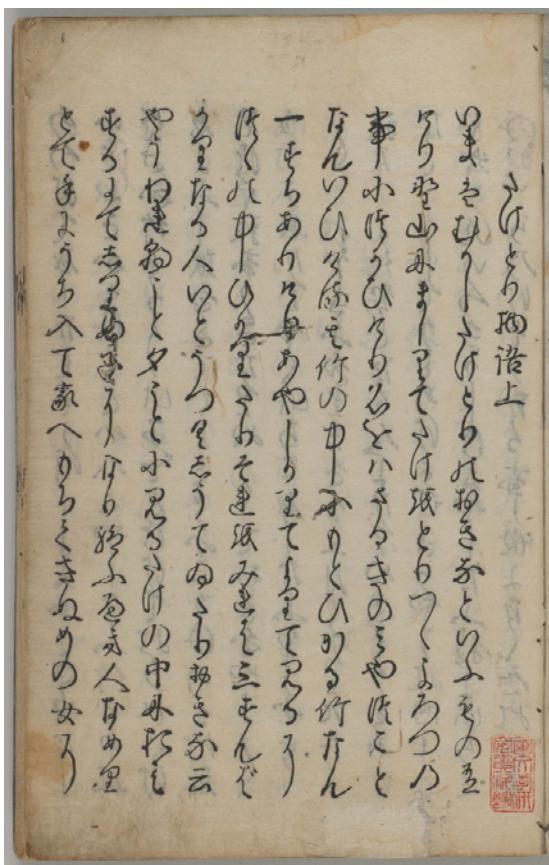
【参考】「物語の祖」

「物語の出で来はじめのおやなる竹取の翁」（『源氏物語』「絵合」）



4

1. 『竹取物語』冒頭



いま□む□し、□ま□おきな□も□の□も□。野正□まし□て□と□り□、□の□の□事□□□ひけり。名をは、さるきの□や□一と□なん、いひけ□。其竹の中□、もとひかる竹なん□ありけり。

盤可多計止利能有/
介利/丹里多計越与/
呂川/尔徒可三徒/
流尔/春知

利正
多計

5

2. 『伊勢物語』

- ・国文研蔵。初雁12-405。
- ・大本2冊。
- ・整版。正徳6年（1716）刊。
- ・印記「遊谷軒所蔵」

【伊勢物語】

平安時代の物語。作者未詳。

ある男の元服から終焉までを一代記風に綴った物語。全125段から成り、「昔、男…」と書き起こされる章段が多く、在原業平（ありわらのなりひら）の歌が多く引用される。絵巻やカルタなどにも作られ、広く親しまれた。

【参考】くずし字と笑話

『醒睡笑』（江戸初期の咄本）より。

刊記



表紙



6

2. 『伊勢物語』参考資料 —くずし字と笑話—

・『醒睡笑』(元和9・1623年序)

筆者をたのみ、『伊勢物語』を写させけるに、「昔男」といふを、仮名に「むし男」と書き、「か」の字を落としたり。主人みつけ、

「最初の三文字の内をさへ、落とされたるや。」

と腹立する時、かの書き手いはく、

「ひたもの書きゆかば、いか程にも末にいや字の候はんを、足しにつかまつり候はん」

と。

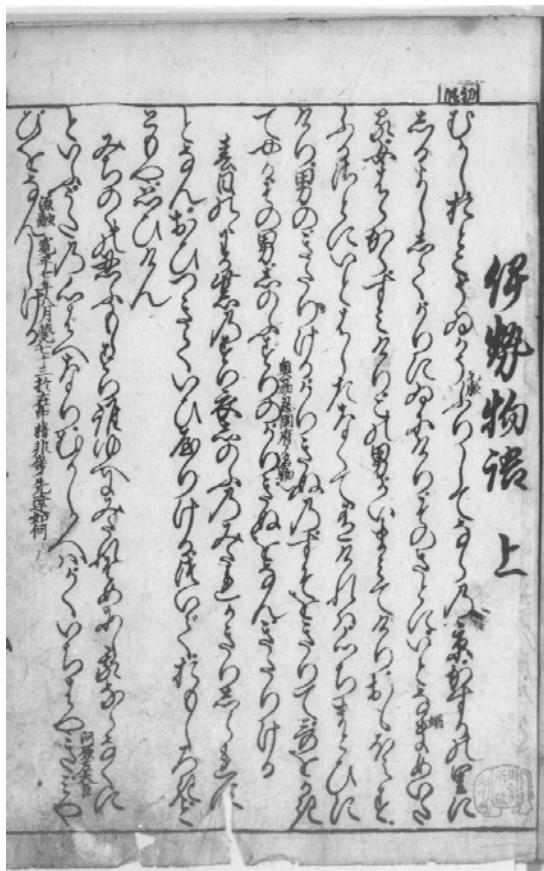
（卷二「鈍副子」28話）

↓「む加し」と「む可し」。

↓多様な字母の面白さ。

7

2. 『伊勢物語』冒頭



伊勢物語上

□□□、□□□、うゐかうふりしてならの京、□□□里に
□るよし□□、かりにゐに□□、そのさとに、いとなまめい□
□、女□□□、すみけり、

(中略)

【歌】春日□、□□□紫のすり衣□□□のみたれかきり□□□□

(後略)

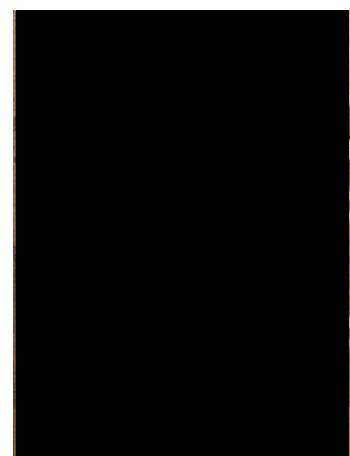
無可之、加寸可能／志
志天、介利、多／累、者
良加良／
能王可志乃不志良運須

8

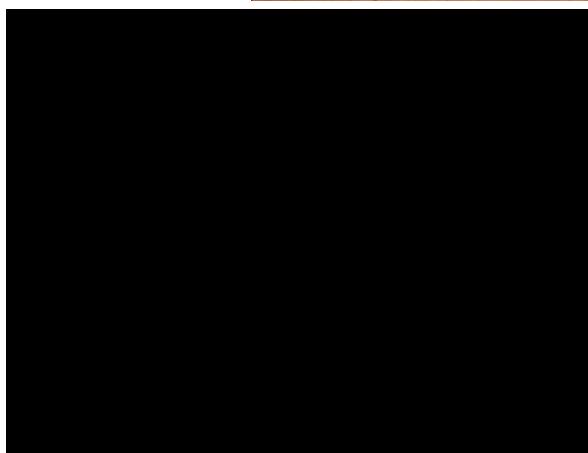
2. 『伊勢物語』冒頭挿絵



斎宮博物館蔵
『伊勢物語図
色紙貼交屏風』
17世紀



東京国立博物館蔵
『伊勢物語絵巻』
17世紀、住吉如慶



9

3. 『源氏物語』

第17帖表紙

- 国文研蔵。サ4-75。
- 23.5×17.4cm。54帖。
- 近世初期写。
- 印記「見真斎図書記」「琴韻書
声裏是吾家」

【源氏物語】

平安時代成立の物語。紫式部作。

【参考】崇福寺蔵『付喪神絵巻』

16世紀の絵巻。歳末に捨てられた古道具たちは、捨てられた恨みを晴らすべく妖怪と化す。都で悪行を重ね、詩会や囲碁、博打、絵合までも楽しむが、やがて発心出家して成仏する。

絵合の場面には、『源氏物語』「絵合」の一節が用いられている。



10

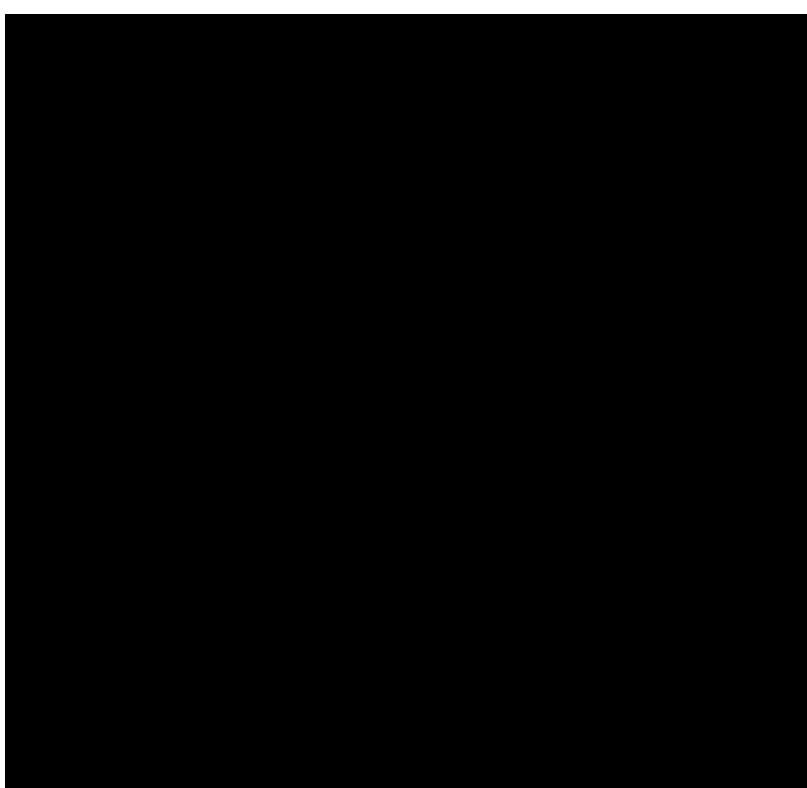
3. 『源氏物語』参考資料 —妖怪たちの「絵合」—

『付喪神絵巻』画中詞

一番に、たけとりの
をきなに、うつほの
としきかけの
ゑをあわす
へし

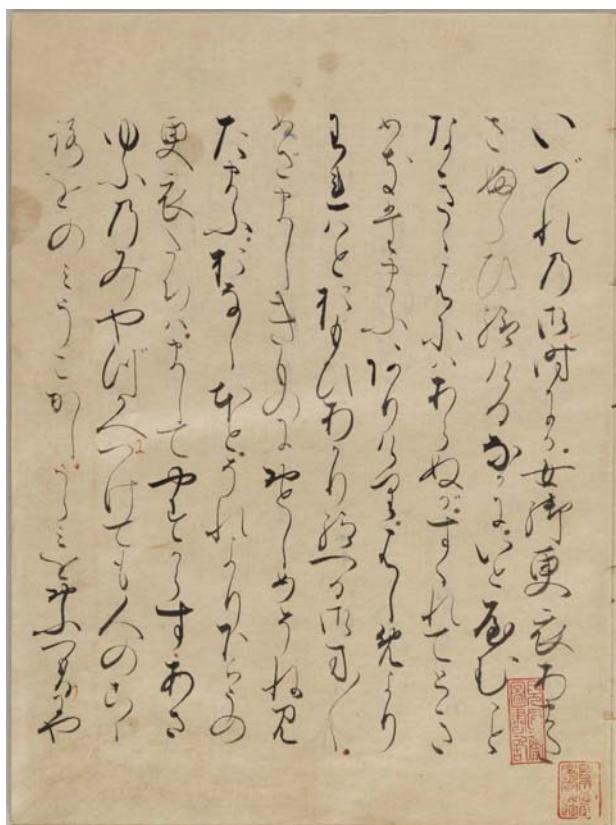
『源氏物語』「絵合」
まづ、物語の出で来て
めのおやなる竹取の翁
に、うつほの俊陰を合は
せて争ふ。(中略)

次に、伊勢物語に上三
位を合はせて、また定
めやらず。



11

3. 『源氏物語』冒頭



以川礼乃尔可、安末多
／左婦良比介留屋／安
良奴可／堂

なきゝはには、すくれてとき
めき□まふありけり。

12

4. 『枕草子』

- 国文研蔵。サ5-23。
- 24.3×18.2cm。7帖。
- 近世初期写。
- 印記「見真斎図書記」「琴韻書
声裏是吾家」

【枕草子】

平安時代の隨筆。清少納言作。

【参考】『紫式部日記』より

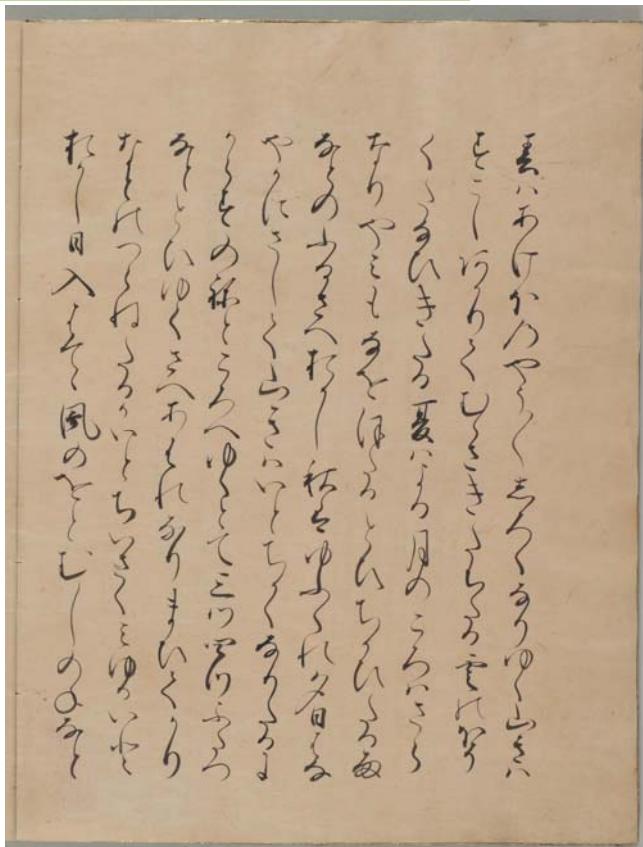
清少納言こそ、したり顔にいみじう
侍りける人。さばかりさかしだち、
真名書きちらして侍るほども、よく
見ればまだいと足らぬこと多かり。
かく、人にことならんと思ひこのめる
人は、かならず見劣りし、行く末
うたてのみ侍れば（後略）

※同日記には、式部に「日本紀の御
局」という異名がついたことも記す。



13

4. 『枕草子』



安計本乃志呂久
春多知多留能本曾
久

春は□□□□。やう＼＼□□□なりゆくもは、
□＼＼あかりて、むのやれ□□□の翻□、□□
□たなひきたる。夏は(後略)

14

5. 『徒然草』

- 国文研蔵。高乘89-42。
- 28.0×20.2cm。2冊。
- 製版。寛文10年（1670）刊。
- 印記「富寿栄軒書籍」

【徒然草】
鎌倉時代の隨筆。兼好法師作。
・小川剛生「卜部兼好伝批判—「兼好法師」から「吉田兼好」へ—」（『国語国文学研究』49、2014年3月）参照。

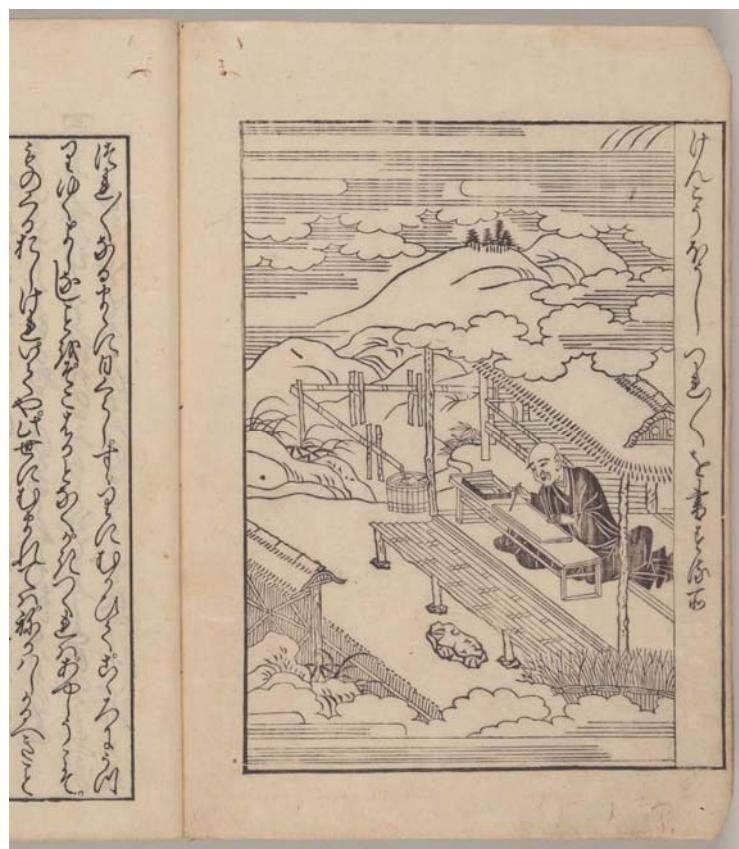
【参考】 恋文を代筆した兼好
高師直（こうのもろなお）は鹽治高貞（えんやたか
さだ）の妻に横恋慕し、兼好に恋文を代
筆させて女に届けた。きつく香をたき
しめた紙に長々と恋心を綴った文は、
すぐ庭に捨てられた。師直は兼好を
出入り禁止にし、別人に恋文を代筆
させた。今度は女は文を読んだ。文
には、和歌一首のみが書かれていた。
（『太平記』卷21）



新板 つれ＼＼草上
（徒札）
ゑ入

15

5. 『徒然草』冒頭



けんこうほうし つれ／＼を書する所
(絵)

□□＼＼なるまゝに日へらしすゝにむかひて、つゝううう
□ゆくよしなこと□、そこ□□となく□□つぐれは、あやしうそ
□のくる□しけれ。

徒連里尔川／里越、者
可可記／毛於

16

6. 『平家物語』

- 国文研蔵。99-19。貴重書。
- 26.9×19.8cm。12冊。
- 古活字版。寛永元年(1624)刊。
- 印記「慥々齋図書」「素観生一過読」

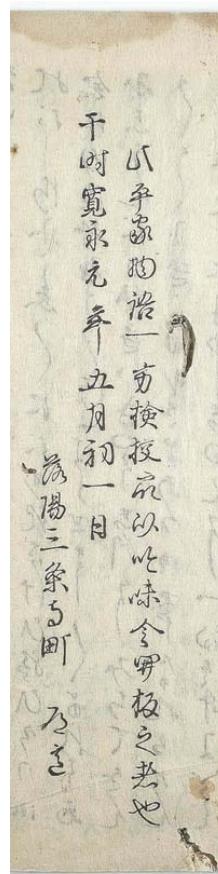
【徒然草】

鎌倉時代成立の軍記物語。平清盛の全盛から、源頼朝の挙兵、源義経の活躍、壇ノ浦での平家の滅亡までを描く。

掲出本は平家語りの一方流(いちかたりゆう)の本文。刊記に「この平家物語は一方検校衆、吟味をもってこれを開板せしむるものなり」とある。

→此平家物語一方検校衆以吟味令開板之者也／于時寛永元年五月初一日／洛陽三条寺町 道意

【参考】平敦盛の哀話—幸若舞「敦盛」—



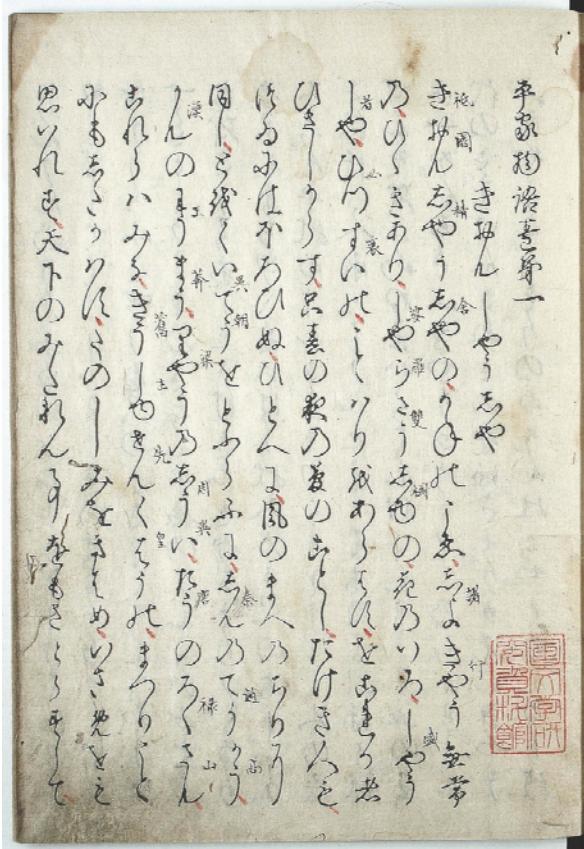
刊記



表紙(後補)

17

6. 『平家物語』冒頭



志志、可年能恵、志／志／比
川寸以能、越者須、者／徒尔
本、尔、耳

同し(後略)
□み□は□ろひぬ、ひと□、風のまへのぢり□
ひさしからす、只春の夜の夢のことし、たけき人も、

きおん□やう□やの、□□□□□、□よきやう無常
の、ひゝきあり、しやらさう□ゆの、花のいろ、しやう
しや、□□□□□、ことはり□あら□□、をれる□
ひさしからす、只春の夜の夢のことし、たけき人も、

18

6. 『平家物語』参考資料 一平敦盛(たいらのあつもり)の哀話一

「敦盛」あらすじ

一の谷の合戦で、平家は源氏に破れ、敗走する。平清盛の甥、敦盛は、退却船に乗り遅れてしまう。船を追って渚に馬を乗り入れたところで、敦盛は源氏方の熊谷直実に一騎打ちを挑まれ、討たれてしまう。敦盛はいまだ16歳の美少年、笛の名手であった。一方、直実は、16歳の子息を合戦で失ったばかりであった。戦いは源氏の勝利に終わったが、直実は世の無常を観じ、出家する。



舞の本「敦盛」より、
熊谷直実(上)と平敦盛(下)
(内藤くすり記念博物館蔵)

人けん五十ねん けてんのうちを くらふれは
ゆめまほろしのことくなり 一度しやうをうけ
めつせぬものゝあるべきか
(国立国会図書館デジタルコレクション『幸若舞集』「敦盛」。寛永年間刊)



アツモリソウ(左)とクマガイソウ(右) 林野庁HP

19

7. 『江戸名所記』

- 国立国会図書館蔵(古典籍資料室)京-21。
(国立国会図書館デジタルコレクションより)
- 27cm。7冊(合2冊)。
- 製版。寛文2年(1662)刊。
- 印記「榊原家藏」「故榊原芳埜納本」「東京圖書館藏」。

【江戸名所記】

浅井了意(慶長17・1612~元禄4・1691)作。仮名草子。地誌。

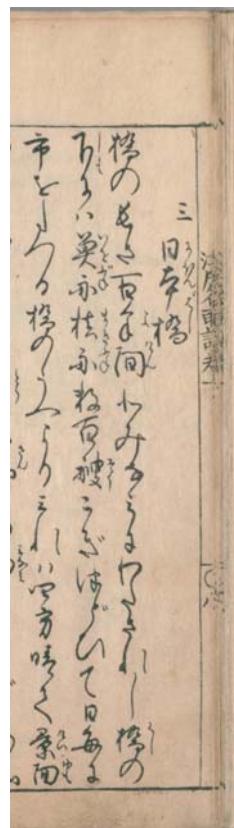
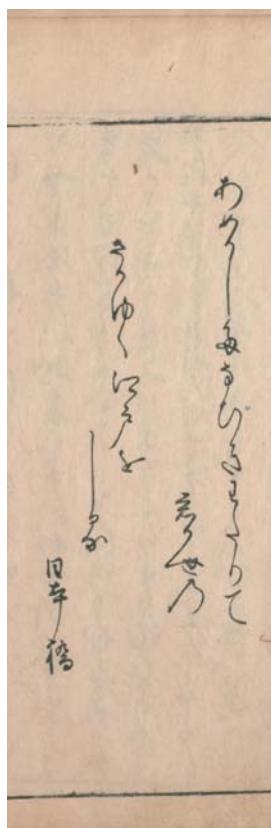
春の陽気に浮かれ出た作者が友人と江戸の名所を巡る。江戸城、日本橋をはじめ81ヶ所を記載、各場所に和歌や絵1図を付す。その殆どは神社仏閣であるが、浄瑠璃、歌舞伎の繁盛ぶりや故事なども収録する。了意は浄土真宗の僧、仮名草子作者。御伽草子等の奈良絵本の詞書作者としても活躍した。

→御伽草子はくずし字の見方・読み方①
「文正草子」参照。



20

7. 『江戸名所記』卷一「日本橋」



日本橋

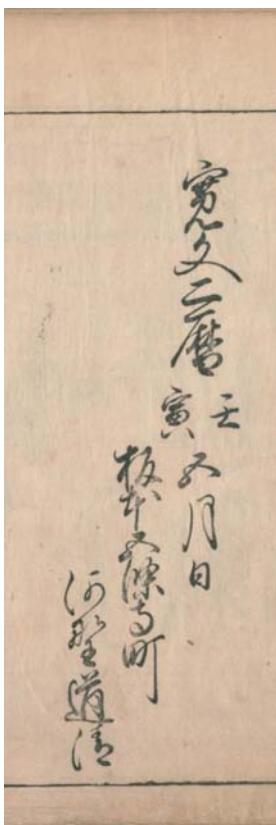
三 日本橋 (振り仮名の字母「尔本无者之」)
にほんばし
よけん
しおり
いをぶねまきふね
そそう
はし
□の長さ百余間、北みなみに□□□□□□□□□□□□
□□は、魚舟檣舟□百艘□□□□□□□□□□□□□□□□
市をたつる (中略)
あめ□□□なびき□□□□□□
□□□□江戸を
し□
君か世の□□□□□□
橋和多左礼之橋
下尔数徒尔
可之多王多利天
左可由久
累

21

7. 『江戸名所記』 挿絵・刊記

刊記

「日本橋」挿絵



寛文二曆壬寅五月日
坂本五條寺町
河野道清

清道河町五條寺五月日

8. 『世間胸算用』

- 国文研蔵。ナ4-954。
- 23.8×16.5cm。5冊。
- 製版。元禄5年(1692)刊。
- 印記「天幸堂」

【世間胸算用】

井原西鶴（寛永19・1642～元禄6・1693）作。
浮世草子。全20章の短編から成る。
一年の総決算の日、大晦日に焦点を
絞り、歳末の庶民の姿を活写する。
西鶴は俳諧師としても著名。一昼夜に
吟じた句数を競う「矢数俳諧」で、
最高記録23500句の独吟を成した。

【参考】西鶴辞世句と「敦盛」
浮き世の月見過ぎしにけり末二年
（『西鶴置土産』）
人生五十年 化天のうちを比べれば 夢
まぼろしのごとくなり（幸若舞「敦盛」）

刊記

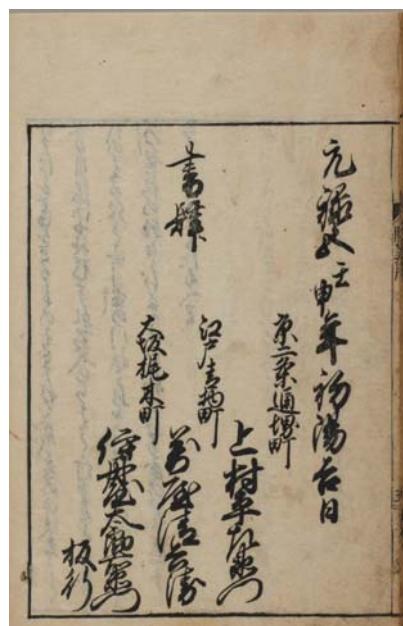
書肆

大坂梶木町

江戸青物町

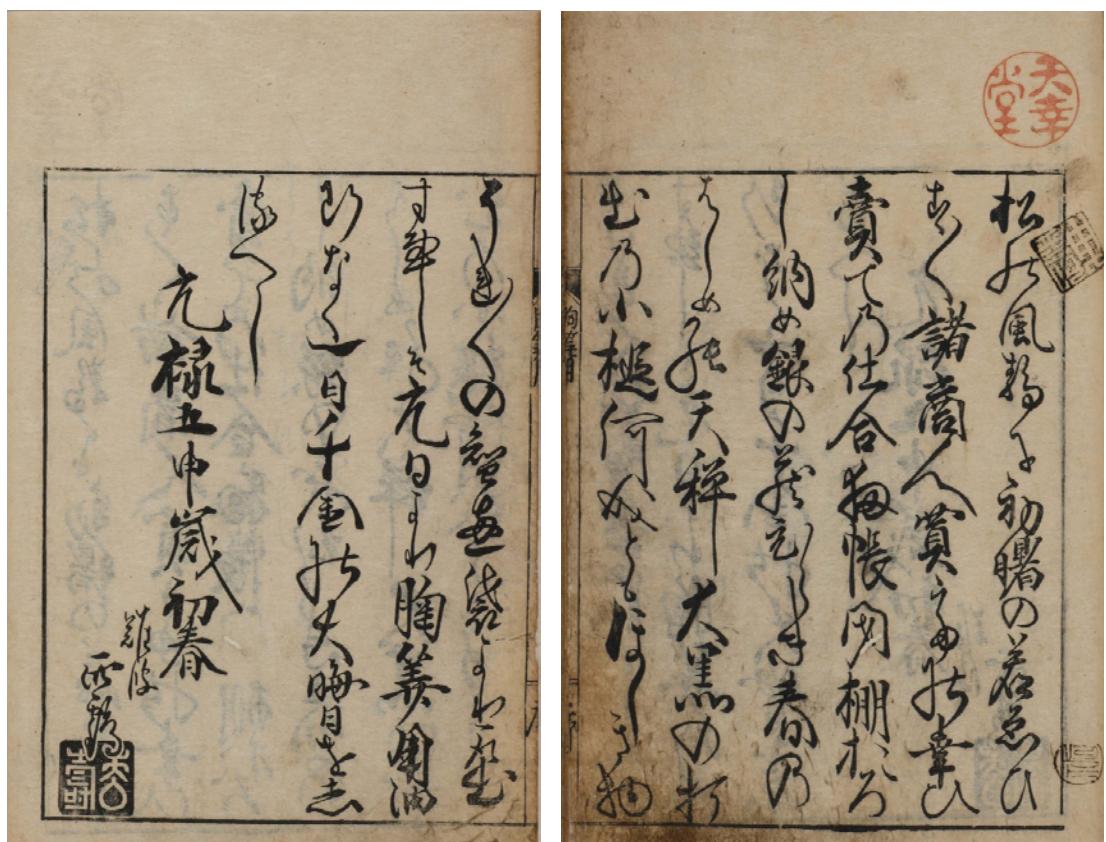
初陽吉日
京二条通堺町

23



伊丹屋太郎右衛門
板行

8. 『世間胸算用』序文



24

8. 『世間胸算用』序文

【現代語訳】

松吹く風も静かな太平の御代の元日、夜明け方に「若えびす、若えびす」と触れ声して若えびす売りが来ると、諸商人が「買うての幸い、売つての幸せ」のことわざ通り、縁起をかついで買い求めることである。さて、帳綴じ、棚おろし、納め金を入れた蔵の蔵開きも無事に済んで、正月の初め、銀天秤で銀貨をはかるのを見ると、その時の天秤の木槌は、大黒様の打出の小槌かとも思われ、何であっても欲しい物は、商人はそれぞれの知恵袋によつて稼ぎ出すことである。それゆえ町人は、元日より胸算用に油断なく、大晦日は一日千金にもあたることを知らなくてはならない。(新潮日本古典集成『世間胸算用』より)

□□□風、静□、初曙の□□□
 □□□、納め□の□□□□、買□□幸ひ
 □□□仕合、扱帳閉、棚□□
 □□□天秤大黒の打
 □□□出の小槌何成とも□□□物
 □□□の智恵袋□□取出
 □□□す事そ、元日より胸算用□
 □□□断なく、一日千金□大晦日を
 □□□へし
 □□□□□□□初春
 □□□□□□□西鶴

松能爾初若恵	比春諸商人
帝能天乃於呂	之銀蔵飛良
幾者之女能	保之幾曾
連与利油	能志流
元禄五申歳	難波

25

8. 「井原西鶴」参考「大矢数」の流行

舟木本「洛中洛外図屏風」より「三十三間堂」の通し矢

岩佐又兵衛(1578-1650)作

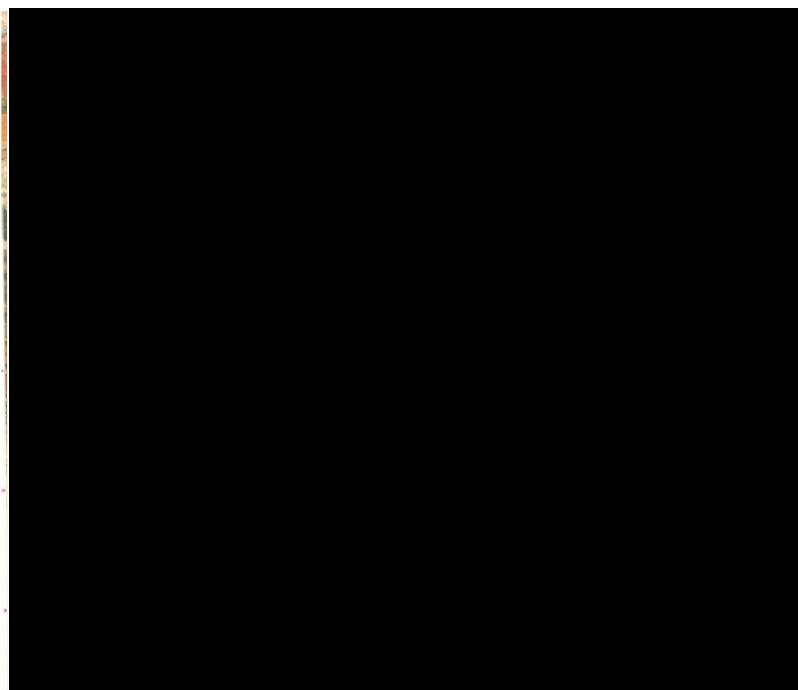
重要文化財

東京国立博物館蔵

【通し矢】京都三十三間堂

などで行われた武技。堂の
縁上で、端から端まで約
120mを射通した矢数を競う。

洛中洛外図等にも描かれる
など、近世初期から流行し、
今なお親しまれている。
一昼夜かけて射る場合、
「大矢数」と呼ばれる。



26

9. 『雨月物語』

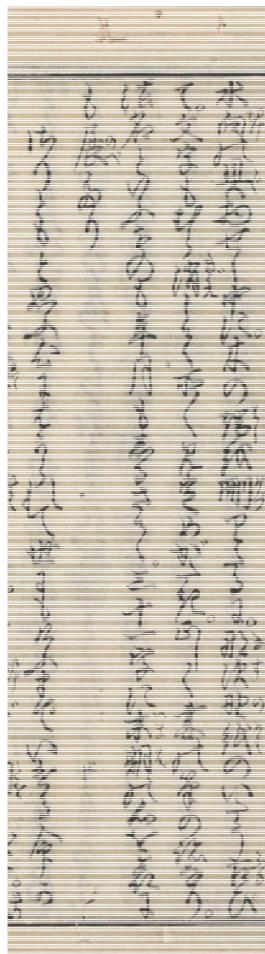
- 国文研蔵。99-125。貴重書。
- 23.8×16.5cm。2冊。
- 製版。安永5年(1776)刊。
- 貸本屋印「書林／菊源／中津」。

【雨月物語】

上田秋成(享保19・1734～文化6・1809)作。
初期読本(よみほん)の名作。国文研本
は虫損が目立つものの、初版早印本
の値は十分にうかがうことができる。

・浅茅が宿 →

乱世の頃、下総国の勝四郎は零落した家を興すため、美しい妻宮木を残して京へ上る。7年後に戻ると、宮木は健気に夫を待っていた。翌朝、勝四郎は崩れかけた我が家でひとり目覚める。宮木は既にこの世の人ではなく、幽霊となって夫を迎えたのであった。



さりともと思ふ心にはかられて世にもけふまでいける命か

水向の具物せし中に、木の端を刪りたるに、那須野紙のいたう古び
て、文字もむら消して所々見定めがたき、正しく妻の筆の跡なり。
法名といふものも年月もしるきて、三十一字に末期の心を哀に
も展たり。
のべ

27

平成27年度 日本古典籍講習会

平成28年1月26日

くずし字の見方・読み方①

国文学研究資料館助教 恋田知子

1

①くずし字とは

- ・1-1 文字資料のうち、楷書の点画(てんかく)を省略した手書き文字、そして手書き文字をもとにした版本の文字。古典籍や古文書などの表記に用いられる。伝存資料が多いことから、近世資料を中心として「くずし字」の範疇に入る傾向にある。
- ・1-2 「くずし字」という用語自体は、おもに歴史学や日本文学、書誌学の研究分野で使用される。書道史では行書、草書など、点画の省略段階を区分し、「くずし字」という包括的な用語は使用しない。ただし、書道史研究の対象外とされやすい近世文書や古典籍の文字については、明確な区分が存在しないことから、「くずし字」という他の研究分野での用語がそのまま一般的に使われている。

2

②くずし字の見方

・2-1 点画の省略

楷書の点画の省略方法には、一定の法則がある。また、時代、地域、個人単位で点画の省略に特徴が見られる場合も多い。→波多野幸彦・東京手紙の会『くずし字辞典』(思文閣出版)など参照。

・2-2 変体仮名

現行の標準字体の仮名とは異なった字体・書体の仮名。明治33年(1900)「小学校令施行規則」で採用されたものとは異なる仮名で、古文書や古典籍を読む上で必須。それぞれ仮名のもととなった漢字を字母という。→【補助資料・変体仮名表】参照。より詳細な変体仮名の字体表は、『日本国語大辞典 第2版』(小学館)や『日本史必携』(吉川弘文館)などに掲載。

3

②くずし字の見方

・2-3 連綿体

二文字以上の文字を続けて書く書体。「つづけ字」と俗称する場合もある。一字一字の区分に注意が必要。

・2-4 異体字、別体字、俗字

通行の字体以外の字体。→日外アソシエーツ編集部『漢字異体字典』(日外アソシエーツ、1994)など参照。

・2-5 敬語・付属語

敬語は単独以外に、「申候」「御座候」などのような定型句として出現すること多く、字画を大きく省略した連綿体となっている。また、「社_(こそ)」や「斗_(ばかり)」など補助的な品詞として働く語も漢字表記されることがある。

・2-6 反復記号(踊り字)

同一の漢字や仮名を重ねる場合、「ゝ」や「々」など符号で表記することが多く、踊り字あるいは畳語などと総称する。

4

③くずし字の読み方

・3-1 漢字と仮名の判別

崩して書かれている文字が漢字なのか、仮名なのかを判別する。

・3-2 前後の文章から文字を類推する

一文字では複数の読み方が可能な場合でも、前後の文章から最適な読みを試みる。→特定の地名や人名などは、判別が難しいため、地名辞典や人名辞典を活用する。

・3-3 清音と濁音の判別

基本的に古典籍の表記では、文字に清濁の別がついていない。濁点「゛」や半濁点「゜」は文章の前後で判断して、解読する側で読むこととなる。→稀に濁点などが付されている資料もある。また、同じ語でも清濁は時代によって異なる場合があるため、時代別の辞書などで確認する。

5

④くずし字を読むための参考資料

【辞典・字典】

- ・林英夫ほか編『増訂近世古文書解読字典』(柏書房、1972)
- ・伊地知鐵男『増補改訂 仮名変体集』(新典社、1975)
- ・若尾俊平・服部大超『検索自在くずし字解読字典』(柏書房、1984)
- ・浅井潤子・藤本篤『古文書判読字典』(柏書房、1988)
- ・中田易直ほか編『かな用例字典』(柏書房、1988→1994新装版)
- ・林英夫『古文書字叢』(柏書房、1990)
- ・林英夫『新編古文書解読字典』(柏書房、1993)
- ・児玉幸多『くずし字用例辞典 普及版』(東京堂出版、1993再版)
- ・児玉幸多『くずし字解読辞典 普及版』(東京堂出版、1993再版)
- ・くずし字研究会『画引きくずし字解読字典 増補改訂・索引付』(新典社、1994)
- ・大石学『改訂新版古文書解読事典』(東京堂出版、2000)
- ・波多野幸彦・東京手紙の会『くずし字辞典』(思文閣出版、2000)
- ・林英夫『江戸版本解読大字典』(柏書房、2000)
- ・林英夫『音訓引き古文書字典』(柏書房、2004)
- ・法書会編輯部『五體字類 増補机上版』(西東書房、2004)

6

④くずし字を読むための参考資料

- ・林英夫『入門古文書小字典』(柏書房、2005)
- ・森岡隆『図説かなの成り立ち事典』(教育出版、2006)
- ・笠間影印叢刊刊行会編『字典かなー写本をよむ楽しみ』(笠間書院、2006新装版)
- ・江守賢治『草書検索字典』(三省堂、2007)
- ・飯島春敬『古典かな字鑑 携帯版』(書藝文化新社、2008)

【教材】

- ・若尾俊平『図録古文書入門事典』(柏書房、1991→2005新装版)
- ・林英夫『基礎古文書のよみかた』(柏書房、1998)
- ・吉田豊『寺子屋式古文書手習い』(柏書房、1998)
- ・アダム・カバット『妖怪草紙くずし字入門』(柏書房、2001)
- ・柏書房編集部『覚えておきたい古文書くずし字200選』(柏書房、2001)
- ・柏書房編集部『覚えておきたい古文書くずし字500選』(柏書房、2002)
- ・宗像和重・兼築信行『くずし字速習帳 近代篇』(早稲田大学文学部、2004)
- ・吉田豊『寺子屋式古文書女筆入門』(柏書房、2004)
- ・中嶋隆・兼築信行『くずし字速習帳 近世版本集篇』(早稲田大学文学部、2005)
- ・吉田豊『寺子屋式続古文書手習い』(柏書房、2005)

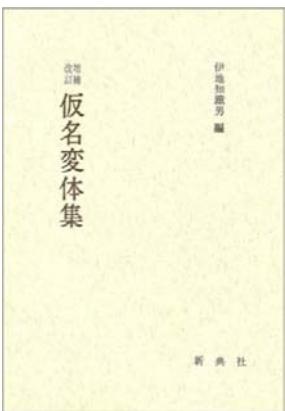
7

④くずし字を読むための参考資料

- ・兼築信行『一週間で読めるくずし字 伊勢物語』(淡交社、2006)
- ・兼築信行『一週間で読めるくずし字 古今集・新古今集』(淡交社、2006)
- ・小島孝之『古筆切で読む くずし字練習帳』(新典社、2006)
- ・菅野俊輔『書いておぼえる「東海道五十三次」くずし字入門』(柏書房、2007)
- ・菅野俊輔『書いておぼえる「江戸名所図絵」くずし字入門』(柏書房、2007)
- ・益田孝『古文書・手紙の読み方』(東京堂出版、2007)
- ・吉田豊『古文書をはじめる前の準備講座』(柏書房、2008)
- ・井上八雲『変体仮名で読む源氏物語全和歌』(新典社、2010)
- ・武井和人『日本古典くずし字読解演習』(笠間書院、2010)
- ・中野三敏『古文書入門くずし字で「百人一首」を楽しむ』(角川書店、2010)
- ・中野三敏『古文書入門くずし字で「おくのほそ道」を楽しむ』(角川書店、2011)
- ・西田知己『江戸のくずし字学習図鑑』(東洋書店、2011)
- ・中野三敏『古文書入門くずし字で「東海道中膝栗毛」を楽しむ』(角川書店、2012)
- ・中野三敏『古文書入門くずし字で「徒然草」を楽しむ』(角川書店、2013)
- ・油井宏子『古文書くずし字見わけかたの極意』(柏書房、2013)

8

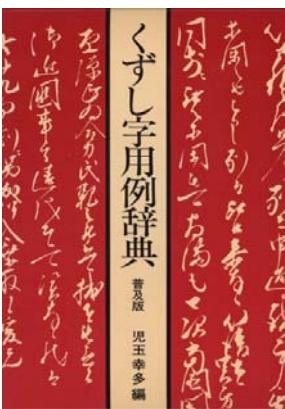
④くずし字を読むための参考資料



伊地知鐵男編
『増補改訂 仮名変体集』(新典社、1975年) 378円



笠間影印叢刊刊行会編
『字典かな—写本をよむ楽しみ』(笠間書院、2006年新装版) 842円



児玉幸多編『くずし字用例辞典 普及版』
(東京堂出版、1993再版) 6,264円



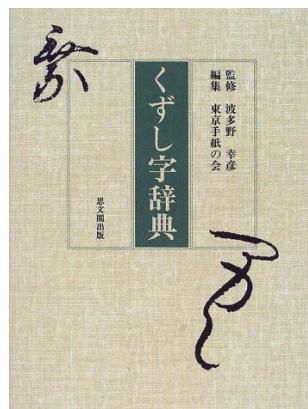
児玉幸多編『くずし字解読辞典 普及版』(東京堂出版、1993再版)
2,376円

9

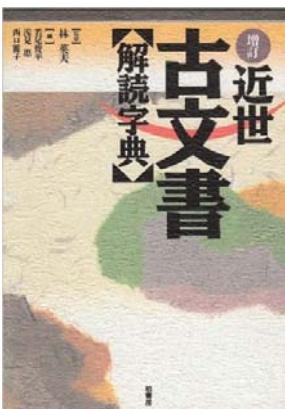
④くずし字を読むための参考資料



江守賢治編・書
『草書検索字典』
(三省堂、2007年) 10,260円



波多野幸彦・東京手紙の会編『くずし字辞典』
(思文閣出版、2000) 6,480円



林英夫ほか編『増訂
近世古文書解読字
典』(柏書房、1972
年) 10,260円



林英夫編『新編古文書
解読字典』(柏書房、
1993年) 3,356円

10

④くずし字を読むための参考資料



東京大学史料編纂所
「電子くずし字字典データベース」
奈良文化財研究所
「木簡画像データベース・木簡字典」



UCLA Yanai Initiative 早稲田大学



大阪大学・国文学研究資料館

11

⑤正月読み初めの吉書『文正草紙』を読んでみよう



国文学研究資料館蔵『文正草紙』江戸中期写奈良絵本

『文正草紙』は、常陸国鹿島
大明神の大宮司に仕えていた文太（後に文正）が塩焼きで財を成し、授かった娘は帝に嫁ぎ、最後は宰相の位にまで昇ったという祝儀物のお伽草子（室町物語）。

その祝言性から、正月読み初めの吉書や嫁入りの調度品にされるなど、豪華な絵巻・絵本が多数制作された。

12

⑤正月読み初めの吉書『文正草紙』を読んでみよう

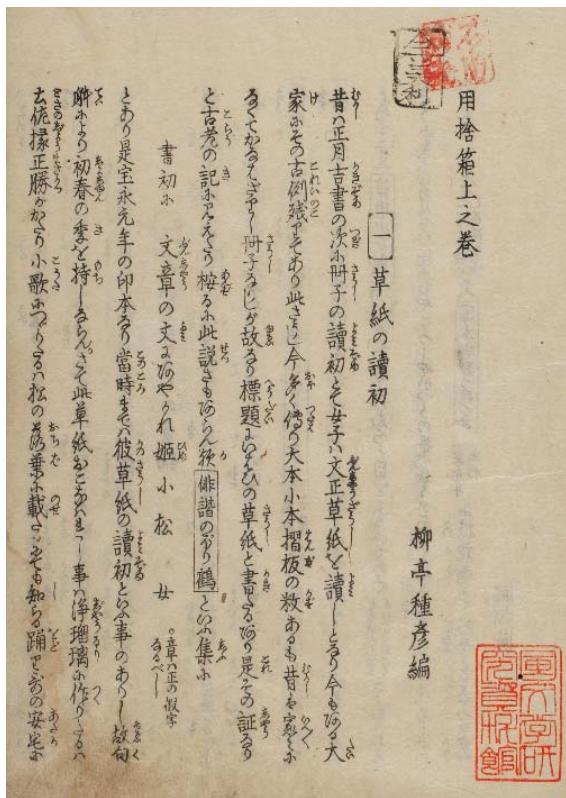
柳亭種彦『用捨箱』上之卷 天保十一年（一八四一）刊

昔は正月吉書の次に冊子の読初とて女子は文正草紙を読しとなり。今もある大

家にその古例残りであり。此さうし今多く伝り大
本小本摺板の数あるも昔は家々に

なくてかなはざりし冊子なりしが故なり。標題に
さうし かき
いはひの草紙と書たるあり。是その証なり
さくし まこと
ゆうだい

と古老の記に見えたり。（後略）



国文学研究資料館蔵『用捨箱』 冒頭

13

⑤正月読み初めの吉書『文正草紙』を読んでみよう

□□□より□□にいたるまで□□

□□ノトを先へつたある中にもい

卷之三

やしきものゝ殊外に成□□□より

□□□までつゐに物うき事なく

トヨタヒロシ

□□□□はひたちの国□□□□文

正と申ものにてそ侍りけるその故

原の風を傳へる